



01 歴史文化学科の紹介

学科の学びについて

歴史文化学科は甲南大学文学部にある5学科のうちの一つです。2001年に創設され、今年で22年目となりました。学科では、時間(縦軸)と地域・文化(横軸)を交差させながら、人々の歴史や文化、今に生きる姿を学ぶことを目標としています。そのために、歴史学(日本史・西洋史・東洋史)・地理学・民俗学の3つの専門領域を融合した教員(次頁以降で紹介)とカリキュラムの構成となっています。それは、自分の関心のある分野をベースとしつつも、他の専門領域を含めて横断的に学ぶことを意図するからです。

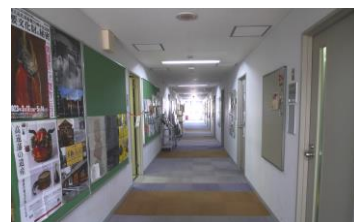
講義は、専門領域毎の積み上げ(基礎から発展)を基本に、実習系科目による実践的な学びや横断領域的な学びを重視した内容となっています。演習科目は1年次から始まり、2年次以降は専門分野のゼミに所属し、学びの集大成である卒業論文(2万字程度)の作成に向けて継続的に指導を受けます。その際、実証的な考えを重視し、資料(文字・画像・事物・人・場所など)を通じ考えることを大事にしています。また、少人数でのゼミ教育を実施しているのも学科の特徴と言えます。

学科では、専門教育に関わる資格として、教職(社会(中学)・地理歴史(高校))と学芸員の資格を取得することができます。例えば、学芸員課程については、学科の学びを社会と繋ぐ試みを実践的に学ぶ場と捉え、積極的な運営を心掛けており、実際に博物館や美術館での学外授業の機会が多くあります。

近年、「歴らぼ」(歴史文化らぼ)の活動も盛んになりました。これは、正課の講義ではないですが、学生が自分達の関心に基づいて運営する勉強会で、教員や学科のサポートのもと、歴史文化に関わる事象を実践的に学ぶ場となっています。例えば、古文書班、地図班、読書班など、複数の活動が実施されています。

学科の施設について

当学科の施設は主に10号館5階にあり、そのいくつかを紹介します。学生がよく集まるのは、学科図書室①とラボラトリ②です。本図書館のほか、①にも学科に関わる書籍を揃えており、自習用スペースがあります。②は活動し易いよう環境を整えていて、実習・演習系講義や歴らぼでよく使います。廊下③を挟んで①②の向かいに各教員の研究室④があります。③には博物館展示などのポスターや配布物があり、賑やかな空間です。また、④は学生にとって訪れ易い場所にあります。4階には学科の情報処理室⑤があります。⑤には大型スキャナがあり、地形図のスキャンも可能です。



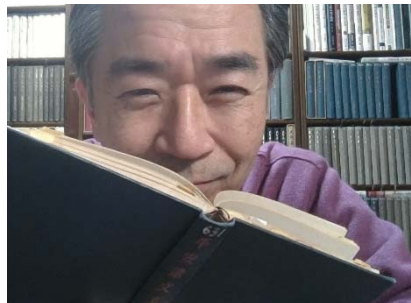
歴らぼ通信の刊行は18号となりました。今回は歴史文化学科自身を紹介するため、学科と教員を紹介する号を作成しました。これまでの通信に掲載した記事の多くは、ホームページ「歴らぼのWEBサイト」(<http://www.konan-u.ac.jp/hp/rekibun>)でも紹介しています。是非そちらもご覧下さい。



日本史

日本古代・中世史

佐藤泰弘



平安時代の古文書集を読む

専門分野：平安時代史

ゼミテーマ：日本の古代・中世

最近の業績：「国府の変容—文献史学から—」『季刊考古学別冊 37』

専門領域は平安時代史で、貴族社会や地方行政を研究しています。貴族の日記、寺社の古文書、文学作品など色々な史料を用いて事実を確定し、社会の仕組みや時代の転換点を見つけていきます。よく知られた史料を読み替えることや、小さな発見からイメージを広げていくことが好きです。とはいえ、平安時代だけで平安時代史は分かりません。時間的にも空間的にも、できるだけ広い範囲を視野に収めることを心がけて、気になった本は片っ端から買っています（大半は積ん読だけ）。そして、好きな作家の小説やマンガを読むように、面白いと思った研究者の著書や論文を集中的に読むのが好きです。

日本近世史

東谷 智



研究室で『松江市史』を手に話しをしています。編集委員（2009～2019年度）として全18巻を刊行しました。年に何回も松江に通って調査・研究と市民への成果還元を行いました。2015年に松江城が国宝に指定される過程を知れたのも良い思い出です。

専門分野：戦国から幕末維新の日本史

ゼミテーマ：近世・近現代日本の社会と文化

最近の業績：「彦根藩伊賀歩の職務とその供給源をめぐって」（山田雄司編『忍者学大全』東京大学出版会、2023）

江戸時代の支配や行政の仕組みを研究しています。江戸時代は、大量の文書が作成されました。その文書（古文書）を読み解き、歴史の表も裏も解明しています。また、文化財の保存や歴史遺産の活用に関わる仕事もしています。本物の文化財を目にする、手にするというのは本当に楽しいです。古地図を持って城下町を歩くと、過去のイメージがふくらみます。土地土地のおいしいものを食べるのも密かな楽しみです。

東洋史

中国史

新見まどか



2013年、中国河北省にて。五代期の軍閥（藩鎮）が、自らの功績をたたえるために造らせた石碑の一部です。大きい！

専門分野：唐から五代期（7～10世紀）の政治・軍事・国際関係史

ゼミテーマ：東部ユーラシアの歴史と文化

最近の業績：『唐帝国の滅亡と東部ユーラシア——藩鎮体制の通史的研究』（思文閣出版、2022）

長いあいだ、教科書などで描かれる歴史は勝者の目線でした。我々は、王朝の建国者や多大な功績のあった武将を偉人とたたえ、その成功の秘訣を学ぼうとしてきたのです。しかし私が興味を持っているのは、勝者の陰にあった敗者の姿です。あるスポーツの監督は、「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」と語ったとか。実は、勝利から学ぶことよりも、敗北から学ぶことの方が多いいのではないのでしょうか。避けられない衰退や不条理な現実を、過去の人々はいかに受け止め、生き抜いたのか？斜陽の時代に向かう我々に、歴史は問いかけてきます。

イスラーム史

中町 信孝



チュニスの街角にて（2022年）

専門分野：マムルーク朝史、アラブ文化研究

ゼミテーマ：イスラームの歴史と文化

最近の業績：『都市からひもとく西アジア：歴史・社会・文化』（ガジアンテプの章担当、勉誠出版、2021）

思い出話です。世界を揺るがした「9.11 事件」の直後、エジプトで留学生活を送っていた私は、たまたま乗ったタクシーの運転手に「おめでとう！」と言われて面食らいました。エジプトでは当初あの事件は、日本の過激派が原爆への報復として起こしたと思われていたのです。外から見た日本がどのようなイメージを持たれているか、思い知らされる出来事でした。また、逆にこちらは彼らのことをどれくらい理解できているのか、勝手な先入観で見えてはいないかと自分に問い直す良いきっかけにもなりました。異文化を理解するには他者に寄り添い、対話の土台を築く。それが、私の歴史研究の原点です。

西洋史

西洋中世史

図師 宣忠



ガーゴイルの真似をしてみるも、照れ屋のためイマイチ乗り切れなかった若かりし頃の僕
（トゥールーズ、2011年）

専門分野：中世フランス史、キリスト教の異端・異端審問と社会

ゼミテーマ：西洋の古代・中世・近世の歴史と文化

最近の業績：『エーコ『薔薇の名前』—迷宮をめぐる「はてしない物語」』慶應義塾大学出版会、2021年

『ロード・オブ・ザ・リング』や『ハリーポッター』シリーズをはじめ、多くのファンタジー作品には、中世ヨーロッパのモチーフが散りばめられています。元ネタの中世ヨーロッパとはどんな時代だったのでしょうか？

ゼミでは今に伝わる史料や研究文献を読み解きながら、当時の社会のあり方についてみんなで議論します。証拠の断片をつなぎ合わせて過去の世界を解き明かす歴史家の営みは、名探偵が真犯人を突き止めるさまにどこかしら似ていたりもします。「歴史する Doing History」にはいろいろなドキドキが詰まっているのです。あなたも一緒に中世の世界を旅してみませんか？

ヨーロッパ近現代史

高田 実



ペンは生と知の源泉である。
イラスト by 梶原咲良菜

専門分野：イギリス福祉史と生の歴史学

ゼミテーマ：ヨーロッパ近現代史—歴史の名著から学ぶ

最近の業績：『近代ヨーロッパの探求 15 福祉』（中野智世と共編著、ミネルヴァ書房、2012年）

人びとの生は多くの共同性によって支えられてきました。その共同性の層は歴史とともに厚くなり、人びとの生活により大きな安定をもたらしました。その共同性が結晶化したものが「福祉」です。20世紀になると世界各地で「福祉国家」が形成され、人びとはより安心して暮らせるようになりました。ところが、近年では、この生を支える共同性が市場主義によってどんどんと壊されてしまい、人びとは「生きづらさ」を感じるようになりました。「社会」が崩壊し始めています。どうして、こんな世の中になってしまったのでしょうか。それを歴史に問いかけながら考えています。これから生きる若い人びとに、未来への希望を持ってもらえるような「生の歴史学」を構築したいと考えています。歴史学は、生きる力と希望を与えてくれるものです。

歴史地理学

鳴海邦匡



アメリカ議会図書館のマディソン館地下にある地理・地図部で自撮りしてみました。ここには広大な書庫に 550 万枚以上の地図が収蔵されています。

専門分野：近世から近代の地図史（測量など）と景観史（植生など）
ゼミテーマ：主に日本における様々な文化とその歴史
最近の業績：『地図』（ものと人間の文化史 187、法政大学出版局、2021）

人文（歴史）地理学の領域にて、主に古地図を対象に研究しています。去年は、例えば『伊能忠敬の地図作製』（古今書院）で、伊豆半島での伊能図の下図を題材に測量や製図過程とその意義を検証しました。製図や緯度補正の仕方などが分かり面白かったです。こうした地図の測量・作成史が主な関心です。最近では東アジア海域の海図作成史に関心があり、米英国などの図書館や文書館で調査を進めてきましたが、コロナ禍であまり調査が実施できませんでした。ようやく落ち着いてきたので、再開できればと思っていますところ。



「古地図を使って世界を知ろう」（甲南フロント）の記事→

←「古地図を手に新たな街の魅力を発見！」（甲南プラネット）の記事



人文地理学

中辻 享



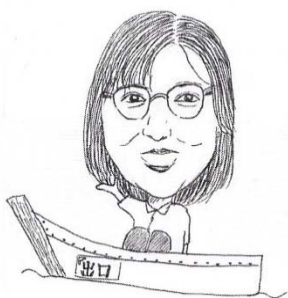
タイのアジア工科大学院にて先生と。2023 年度は在外研究にあたって、この大学に在籍しています。

専門分野：人文地理学、東南アジアの暮らしと土地利用
ゼミテーマ：日本およびアジアを対象にした人文地理学の研究
最近の業績：Land-use and land-cover changes during the Second Indochina War and their long-term impact on a hilly area in Laos. *Southeast Asian Studies*, 8, 2019: 203-231.

山が好きで、山の中で生活している人々について知りたいという思いから、日本や東南アジアの山村について研究しています。特に、ラオスの山村には足を運び続けて 20 年になります。ラオスの人々は焼畑という農業で、山の斜面にお米や野菜を栽培していて、その景色はきれいだし、作物はとてもおいしいです。皆さんにもぜひ、日本とはいろんな点で異なる東南アジアの暮らしを実感してもらえたらと思います。それは日本をより深く知ることにもつながります。ゼミでもフィールドワークを重視していて、日本のいろんなところに出かけています。

民俗学

出口晶子



金毘羅船船♪♪
シュラシュシュ♪♪
イラスト by 梶原咲良菜

専門分野：民俗・地理学
ゼミテーマ：民俗と地域文化
最近の業績：本土近接離島の連絡船と海事交通文化（2023 近刊）
（論文） Dr.ユーパーシャルの日本学と教育研究の軌跡（2021）
東アジアの木造船文化継承のゆくえ（2018）

私が得意とするのは、横断的研究。地理学の出身ですが、船というモノに着目するなか、民族学や歴史学、そして民俗学を学び続けて今があります。事象の現れは、大抵ひとつの学問体系には収まり切らないものです。必然的に空間を俯瞰する地理学の方法と、その場所の現在を見つめる民俗学のフィールドワーク、現在学から歴史や観光をとらえる視点が培われました。横断的学びには羽がはえている。やってきてよかったとつくづく思います。そんな学びを本学科にきて、やってみてはいかが？

編集：鳴海邦匡（教員）・新見まどか（教員）
発行：甲南大学文学部歴史文化学科 発行日：2023 年 2 月 28 日
連絡先：〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1 TEL078-435-2874（学科事務）